

るに其要略せる本すら、久しく湮没して、世に知る人無りしを、再び世に顯れたるは、趙宋の世になむ有ける。

〔醫宗仲景考附錄〕或人告て云く、或人この仲景考を見て、此は近く出たる金匱要略輯義といふ書に既に論じ置たる事なるを、篤胤が始めて考へ出たる如く云るは、腹ぐるなる事なりとて謗れり、いかに其輯義を見たまひつやと言ふに、己大きに驚き、その書かつて見たること無ればこそ、年ごろ此事にも心を止めて、かく考へ定めつるを、思ひきや既に同じ心に考へ定たりつる人の有むとは、早く其書を求め讀てこそと答へて、やがて其書を求め得て讀見るに、余が考へとは甚く異なり、唯その綜槩の條に、仲景金匱玉函、究其目之所繇、晉書葛洪傳云、洪著金匱藥方百卷、據肘後方及抱朴子、自云所撰百卷、名曰玉函方、則二者必是一書、由之觀之、金匱玉函、原是葛洪所命書、卽唐人尊宗仲景者、遂取而爲之標題、以珍秘不出之故、著錄失其目、歟、林億金匱玉函經疏云、緣仲景有金匱錄、故以金匱玉函名、取寶而藏之義也、案仲景金匱、他書無其目、唯宋本及愈橋本、趙開美本、林序後有一小序云、仲景金匱錄云々、僅出于此、予每疑之、然宋本已載之、則此必唐末作要略者所撰、其文原于肘後方序及抱朴子、味其旨趣、汎濫不經、亦是道流之筆耳、と云ふ説と、彼の小序の所に、徐本刪之爲是、と云ふ語の有のみにて、余が考へと、同日に語るべき論に非ず、略殊にその要略せる時代を、唐末と云へるは、更に據なき説なり、彼小序は、稚川翁の文なれば、固より道流の筆なるに論なければ、味其旨趣、汎濫不經なりとて、徐鎔が本に刪れるを是と爲られしは、輯義の撰者も、いまだ醫藥の道の、玄家に出たる事をば、悟り得られざるが故なれば、論ふかぎりに非ずかし、然は有れど、金匱傷寒論ありし以來、和漢古今に、千萬づの醫學者の中に、肘後方序、抱朴子などを取出て論へるは、一人も有し事を聞ず、然るに今唯この輯義のみ、此議あるは、いと希しき事識にぞ有ける。